

## 知識と情報を編む——書誌をめぐる二、三の断想——

水谷 長志

はじめに——編む書物

あたらしい国語辞書を世に送り出す悲喜こもごもを描いた三浦しをんの佳篇『舟を編む』<sup>(1)</sup>は、映画化もされて、記憶に残っている方も多いだろう。

近代日本国語辞書の誕生となった大槻文彦の『言海』を踏まえ、『大渡海』と命名されたあたらしい国語辞書の編集担当として第一営業部から抜擢された馬締<sup>まじめ</sup>青年に、「辞書は、言葉の海を渡る舟だ」と「魂の根幹を吐露する思いで、(先輩編集者の)荒木は告げ」、監修の松本先生は続けて、「海を渡るにふさわしい舟を編む」と静かに語る印象深い場面が、冒頭にある。<sup>(2)</sup> 映画『舟を編む』の松本先生役は加藤剛の遺作一本手前の映画作品となったが、晩年の代表作として高い評価を得ていることを書き添えておきたい。

参考業務 (reference work) および参考図書 (reference

books) についての研究を通して、戦後日本の図書館学を牽引した長澤雅男は、その著書『情報と文献の探索』<sup>(3)</sup> あるいは『情報源としてのレファレンスブック』<sup>(4)</sup> において、図書館における図書は、「通読する種類のもの」と「一部分を参照するだけで利用目的が達せられる種類のもの」とに大別されるとし、前者を「読む本」、後者を「調べる本」として、参考図書の訳語を当てている。また、参考図書の要件の一つに、「形式面では、項目見出しを立て、それらを一定の配列方法にしたがって編成していること」を挙げて、「編む書物」としての参考図書の特性を示している。さらにこの参考図書を「事実解說的な」ものと、「案内指示的な」ものの二つに分岐させている。

本稿においては、参考図書のうち後者の「案内指示的な」機能を持つと言われる「書誌」について、二、三の断想を述べてみた

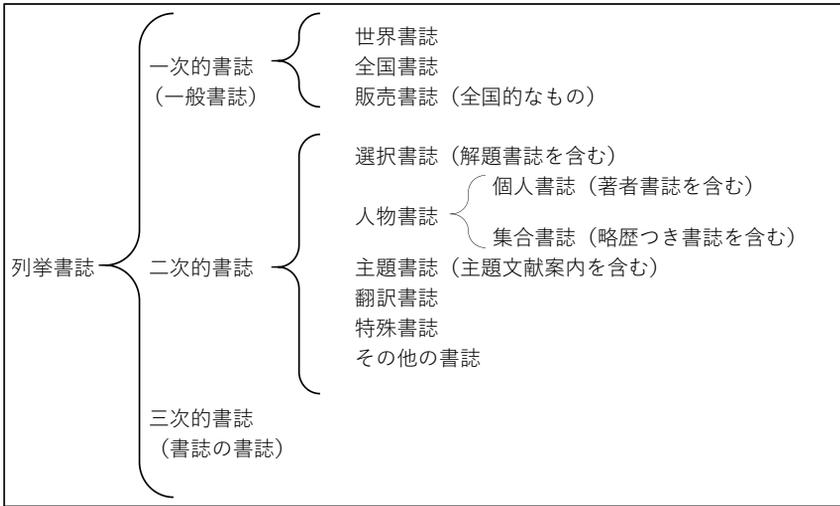


図1 書誌の種類

出典：長沢雅男、石黒裕子『情報源としてのレファレンスブック』（新版）p.166. より

い。特に長澤による「書誌の種類」(図1)においての一次的書誌としての「世界書誌」と、二次的書誌としての「個人書誌」の一端に触れることになる。

本稿は、高野彰が『図書館情報学ハンドブック』の「2・3 書誌学」<sup>⑤</sup>において展開した、特に西洋の「分析書誌学」(analytical bibliography)に及ぶものではないことをあらかじめお断りしておく。「書誌の種類」については、長澤、堀込静香、および日本索引家協会の活動を踏まえて刊行された『書誌をつくる 上・下巻』<sup>⑥</sup>において示されている書誌の種類を註7に補足しておく。

### 一・ジョンソン博士のある警句をめぐって

現在、筑波大学情報学群知識情報・図書館学類となっているこの学類は、かつては国立大学唯一の図書館情報学の単科大学がその前身であった。図書館情報大学の第三代藤川正信学長には、四〇年代初年の著作として「人類の持っている全知識からあなたの必要な知識を引き出す本」という副題を持つ『第二の知識の本』という新書がある。教授であった藤川の図書館情報学概論を聴講したとき、例えば梅棹忠夫の『知的生産の技術』や加藤秀俊の『整理学』といった情報化社会到来に備えよ、という類の啓蒙的ベス

トセラを凌駕する内容であるにも関わらず、自ら、早すぎた名著と語っていたことを記憶している。

その新書の扉には、サミュエル・ジョンソン博士 (Dr. Samuel Johnson, 一七〇九―一七八四) の、図書館学の世界では、インターナショナルに高名な次の言葉が掲げられていた。ジョンソン博士の傍らに常に居て、いまで言うならば一種の「追っかけ」ではないかと思うのだが、博士にいつも帯同し(図2)、博士の語る多くの警句やジョークに満ちた言葉を記録して、伝記文学の最高峰とも呼ばれるジェイムズ・ボズウェル (James Boswell, 一七四〇―一七九五) が著した『サミュエル・ジョンソン伝』の一七七五年四月一八日の頁に顕われるものだ。

Knowledge is of two kinds: we know a subject ourselves,  
or we know where we can find information upon it.  
James Boswell. *The Life of Samuel Johnson*. 18 Apr., 1775.

藤川訳 (一九六三):

「知識には二種類ある。自分で何かを知っているか、知りたいものについて何を調べたらいいかを知っている。」



図2 ジョンソン博士とボズウェル (右)

*Walking up the High Street, Edinburgh*, etching from *Picturesque Beauties of Boswell, Part the First*, by Thomas Rowlandson (1757-1827), after Samuel Collings (active 1784-95), date: May 15, 1786.  
<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/392695>

Courtesy Metropolitan Museum of Art, New York. Accession Number: 17.3.888-359

『第二の知識の本』新潮社（新潮ポケット・ライブラリ）、一九六三年、扉の翻訳。

ボズウエルの『ジョンソン伝』はこれまで抄訳と全訳の二書が刊行されているが、全訳をなした中野好之は次のように訳している。

中野訳（一九八二）：「知識には二種類あって、我々は或る主題を自分で知るか、それともこの主題についての情報がどこでえられるかを知るかです。」

続けて、「我々が何かを調べようと思う時にまず最初にせねばならぬことは、いまままでにどんな本がこの主題を取扱ったかを知ること、我々がカタログを検索したり、図書館の書物の背表紙を通覧するのはこのためです」とその理由が述べられている。

以上、J. ボズウエル著、中野好之訳『サミュエル・ジョンソン伝』第二巻、一三九頁、みすず書房、一九八二年。『ジョンソン伝』全訳版。後に、抜粋版として『ジョンソン博士の言葉』もある（同社、二〇〇二年）。

この言葉の語られた場面は、ボズウエルがいつものようにジョンソン博士のお供をしてケンブリッジ卿の書斎に入るや、博士がその本棚に走り寄るのを、同道の画家レイノルズが、いつもの奇

妙な癖ですな、と皮肉った物言いに対しての博士の反撃の一言であった。

藤川はその著『第二の知識の本』においては、ジョンソン博士への言及は本文中にはどこにもない。一方で度重ねてこの言葉を引用して紹介しているのが、伊那谷の老子となった加島祥造である。

「本書（『英語の辞書の話』）の基本的な方向は巻頭の第一の引用句―ジョンソン博士の言葉―に要約されてい」として左記の訳文を載せている。<sup>8)</sup>

加島訳（一九七六）：「知識には二種類ある。ひとつはある主題について自分が知っているという場合の知識であり、もうひとつは、その主題についての情報がどこにあるかを知っている、という場合の知識である」

『英語の辞書の話』講談社、一九七六年、八頁。

加島にはもう一つ別の訳があるので併せて紹介しておく。

加島訳（一九八三）：「知識には二種類あるのです。ひとつは私自身がそれについて知っている場合の知識だ。もうひとつは、自分の知らぬことを知るための方法についての知識だ。」

『新・英語の辞書の話 引用句辞典のこと』講談社、一九八三年、一一一頁。後に講談社学術文庫で『引用句辞典の話』として再刊、

一九九〇年、一九四―一九五頁。

戦前昭和一六（一九四一）年に上巻が翻訳（抄訳）された岩波文庫の神吉三郎の訳も併せて紹介しておこう。

神吉訳（一九四六）二「知識には二種類ある。われ／＼が自身その問題を知っている場合と、それについての知識が何處を探したら得られるかを知つてゐる場合とです。」

『サミュエル・ジョンソン伝 中巻』岩波文庫、一九四六年、一二六頁。

ここに藤川、中野、加島そして本邦初訳（と思われる）の神吉の訳文を並べてみたが、さすがに藤川訳は、「何を調べたらいいか」となっており、図書館の中の風景を髣髴とさせる。

つまり、藤川がこの警句の or 以下の “we know where we can find information upon it” を「第二の知識」と呼び、図書館情報学概論において語つたことを敷衍して書くならば、図書館には「第一の知識」を内包するあまたの本がある、図書館員はそこにある知識のすべてを持ち、知りえているわけでは決してないが、「第一の知識」へのアクセスの手立てを開発し、それを必要とする利用者へ、その知識や情報の「ありどころ」を指し示す、index することができるのであり、否、できなければならず、その「第二の知識」こそが、図書館というものの機能の本質であり、図書館

員の専門職能人としての技能の根底にあるべきものだ、と藤川は、草創間もない図書館情報大学での図書館情報学概論において、語っていたと思われるのである。

そして、案内指示的な参考図書として位置づけられる「書誌」の機能こそが、ジョンソン博士の “or we know where we can find information upon it” のこの言葉を具現化するものであることが伝えられたのである。

先にジョンソン博士のこの警句がインターナショナルなものだと書いたのには、訳がある。

藤川は戦後間もなくフルブライト留学生としてアメリカに渡り、ジョージ・ピーボディ大学でアメリカ流のライブラリ・サイエンスを学び、帰国後に慶應義塾大学の文学部に新設のライブラリ・スクールで教鞭を執つた。ジョンソン博士のこの警句も、おそらくはアメリカで学んだ講義の一コマで接したのではないかと推測している。『第二の知識の本』の扉を飾つたこの警句について、藤川が本文ではなんら触れていないことは、既に記した。

閑話休題ながら、筆者は、本学着任の前は、長く東京国立近代美術館のアーカイブラリに勤めたが、最終盤の二〇一四―一六年の三年間は、文化庁からの支援を得て、「海外日本美術資料専門家（司書）の招へい・研修・交流事業」（通称 JAL プロジェ

クト)を企画実現した。<sup>9)</sup>

これは海外の日本美術に関わって研究を補佐する日本研究図書館員を日本に招へいするものであり、三年間二五名、一二カ国から関係者を招いた。プロジェクト最終日には、各人のJALプロジェクトへの印象と得たもの、今後への展望などを日本語で公開プレゼンテーションを行うものであった。

二年目の二〇一五年の参加者の一人、ロンドン大学の東洋アフリカ研究学院、通称SOAS (the School of Oriental and African Studies) の図書館でアーツ・アンド・マルティメディア・サブジェクト・ライブラリアンとして勤務するWさんは、韓国の西江大学校(ソガン大学)で学士(史学)を取得、後に英国へ渡り、Loughborough University (ラフバラ大学)で修士(情報・図書館経営学)とMCLIP (Member of Chartered Institute of Library and Information Professionals) Certificationを取得して、二〇一一年より現職に勤務している。

その彼女のプレゼンテーションの最終スライドで、Wさんはまさにジョンソン博士のこの警句を紹介して、「最近の研究傾向は何か、またどこでどんな知識を見つけたことができるかについて、司書としての知識を積むための努力をしなければならないと考えらる」と締めくくった。<sup>10)</sup>

プレゼンテーションの後で、どこでこのジョンソン博士の言葉を知ったのかの筆者の問いに、ラフバラ大学での講義で、とWさんが語ったように、おそらく多くの海外の大学学部および大学院での図書館学の講義で、このジョンソン博士の警句は、図書館と図書館員の本質を伝える言葉として広く引用伝授されていることが確信されるのである。

## 二. ゲスナーの世界書誌をめぐる

次に書誌の歴史、とりわけ世界書誌の歴史の一端をふり返ってみたい。

図書館とその歴史に関心を寄せる者にとって、「アレクサンドリア」という地名の響きには「失われた」が必ずついてまわり、常に「アレクサンドリアの図書館」は「失われた図書館」の隠喩<sup>メタファー</sup>となっている。

かつて壮麗な図書館がアレクサンドリアのムセイオン(古代ギリシャ語: Μουσείον、ラテン文字表記: Museion)にあつて、その図書館の崩落の原因は諸説あるものの、キリスト教がローマ帝国の国教となった頃にはその姿を消したらしい。<sup>11)</sup> この図書館が図書館であらしめる最大の理由は、膨大な書物、それはパピルス

に文字が記された巻物状の書物 (Volumen) であるが、それのみではない。例えば、アッシュールバニパル王のニネヴェの粘土版に楔形文字で記録された膨大な文書とその堆積を指して、図書館と言うことは難しい。<sup>12)</sup>

図書館には資料そのものと、それを管理する (司る) 専門職人と資料を検索する手立ての存在が欠かせない。アレクサンドリアの図書館にあったという司書カリマコス (Callimachus, 前三二〇年頃?) の手になる『ピナケス (Pinakes)』と通称される蔵書目録、あるいは蔵書の解題書誌とも言うべきものの存在があつてこそ、アレクサンドリアの図書館は図書館たり得ていると言われているのである。

ローマ帝国の東西分裂から西ローマ帝国の滅亡を経て、西欧は中世世界へと入るのだが、本の様態は巻物から重厚堅牢で、まるで石のような Codex と呼ばれる中世写本へと姿を変えていく。

「祈り、働け」のベネディクト派修道院は僧侶を多くの写字生に仕立て上げ、長い時間の集中を課して、徐々に多数の写本からなる大図書館を形成していく。

ホルヘ・ルイス・ボルヘスの『バベルの図書館』<sup>13)</sup>は、旧約聖書「創世記」の「バベルの塔」を下敷きにし、ウンベルト・エーコによる『薔薇の名前』<sup>14)</sup>は、ボルヘスの『バベルの図書館』へのオ

マージュであつたとも言えるだろう。

二〇一七年四月七月に東京都美術館で開催されたオランダのボイマンズ美術館蔵プリューゲル「バベルの塔」展に出品された大作に見られる執拗で精緻な筆業で描かれたこの大画面から照射される最も強い感興は、「巨大 (huge)」であることと、「未完 (unaccomplished)」である、ということではないかと思われる。

エーコの『薔薇の名前』もまた映画化されているのだが、舞台は、一三二七年の北イタリアのベネディクト派修道院。フランシスコ会修道士バスカヴィルのウイリアム (彼は中世修道院に現れた名探偵シャーロック・ホームズである、シヨーン・コネリーが演じた) が、見習修道士メルクのアドソ (彼もまたホームズの弟子ワトソン君である) とともに侵入に成功する修道院の巨大図書館の中で、ウイリアムは、「キリスト教世界最大の図書館にいる」ことに狂喜する (図3)。

この場面は、『バベルの図書館』のもつとも核となるメッセージの、「途方もない喜び」を実写として描いた、シヨーン・コネリー逼真の演技であつた。しかしながらこの喜びもつかの間、異端審問の処刑が進行する中で、この図書館は、図書館の真の造築者であり、図書館長である盲目の老師ホルヘ・ダ・ブルゴス自らの手によって、幻のアリステレスの『詩字』の第二部「喜劇論」



アドソ分かるか？ キリスト教世界で最大の図書館にいる！

図3 映画『薔薇の名前』より

とともに灰燼に帰すのである。ここにもまた、「失われた図書館」のメタファーが立ち現れるのである。

あらためてボルヘスのメッセージを『バベルの図書館』から抜いてみよう。

「図書館があらゆる本を蔵していると公表されたとき、その第

一印象は途方もない  
よるこびといったも  
のであった<sup>(15)</sup>」

ロジェ・シャルチ

エはその著『書物の秩序』<sup>(16)</sup>の最終第三章をこのボルヘスのメッセージから始めており、「すべての知識を、かつて書かれたすべての書物を集めた図書館を持つという夢は、さまざまな形をとって、西洋文明の歴史に一貫

して存在してきた……この夢はまた、世界の記憶を収容できる建物を造るといふ建築の所作にも指示を与えてきた」と述べている<sup>(17)</sup>。

エーコの『薔薇の名前』の舞台は一三二七年であった。マインツのグーテンベルク (Johannes Gutenberg, 一三九八頃〜一四六八) が活字印刷術を発明する一世紀余にも遡りながら、ボルヘスの『バベルの図書館』さながらの、迷宮かつ巨大な図書館が写本において構築され、蔵されていたことをその物語の背景としている。

一四五五年、マインツでグーテンベルクは四二行聖書を活字印刷術をもって初めて世に送り出した。このルネサンスの三大発明の筆頭にくる新技術は、一五〇〇年までの初期印刷本を特に「インキュナブラ (incunabula)」、揺籃期本と呼称するように、グーテンベルクの頭の思考には、あらたなフォーマットとタイポグラフィからなる革新的な本の開拓者であろうとする意志はひとかけらもなかった。彼にあるのは、中世写本の忠実な再現であり、真に革新的な新たな本の時代の幕開けは、アレックスサンドロ・マルツォ・マーニョの『そのとき、本が生まれた』<sup>(18)</sup>において「出版界のミケランジェロ」と呼ばれた、ヴェネツィアのアルド・マヌーツィオ (Aldus Manutius, 一四五〇頃〜一五一五) の登場によって、大きく歴史は進められた。

その革新の波及の速さは、例えば、一四八二年を舞台に、つまりはグーテンベルクの発明から三〇年も経っていない、パリにおいて、V. ユゴーが『ノートルダムⅡド・パリ』で描いた、「司教補佐（クロード・フロロ）はしばらく黙ってその巨大な建物をながめていたが、やがて溜息をひとつとくと、右手を、テーブルにひろげてあった書物のほうへ伸ばし、左手を、ノートルⅡダム大聖堂のほうへ差し出して、悲しげな目を書物から建物へ移しながら言った。「ああ！これがあれを滅ぼすだろう」<sup>19)</sup>にまで至るのである。言うまでもなく、「これ」とは活字印刷の書物であり、「あれ」とはノートルダムの大聖堂である。

ユゴーが『ノートルダムⅡド・パリ』を著した一八三一年の、ユゴー自身を取り巻く近代ジャーナリズムの圧倒的な力を一四八二年のパリに投影したのであるが、あらたなメディアである活字印刷の勃興による本の増殖は、人をして、「途方もない喜び」を感じさせる一方で、深い精神的危機を司教補佐と同様に感じさせつつ、かつまた、「書物もまた新しい大洪水や蛮族の侵入にそなえて、人知を守る使命をもった避難所なのだ。人類の生んだ第二のバベルの塔なのである」<sup>20)</sup>った（傍点、筆者）。

続けて、ルターの宗教改革に活字印刷術の発明が大きな功績をもたらしたことの連関において、スイス、チューリヒでのツヴィ

ングリの宗教改革の活動に深い感化を受けたコンラート・ゲスナー（Conrad Gessner, 一五一六～一五六五）の『世界書誌』（*Bibliotheca universalis*, Zürich: Christoph Froschauer, 1545）について述べてみたい。<sup>21)</sup>

ゲスナーの伝記を書いたフィッシャーは、「ゲスナーは、十六世紀を激しく動揺させた精神上の闘い——宗教改革とルネサンス——のまっただ中で、生涯を送り、著作を書いた」と評している。<sup>22)</sup>

アン・ブレアの『情報爆発——初期近代ヨーロッパの情報管理術』が昨年、二〇一八年に中央公論新社から刊行された。四四六頁におよぶ大著だが、原書名は、*Too Much to Know: Managing Scholarly Information before the Modern Age* であり、イェール大学から二〇一〇年に刊行の邦訳である。

その序文は、「われわれは、あたかもこれが何かまったく新しいことであるかのように、自分たちは情報化時代に生きていると言っている。だが、実際は、われわれが情報について考えたり、情報を扱ったりする今日の方法の多くは、何世紀も前に遡る思考の型や実践に由来しているのである。本書は最も長く受け継がれてきた情報管理の伝統の一つについて、その歴史を探っている——すなわち、私が便利な略記として「レファレンス書」と読むものの中に……参照を目的として収集し、配置していくという伝統である」と

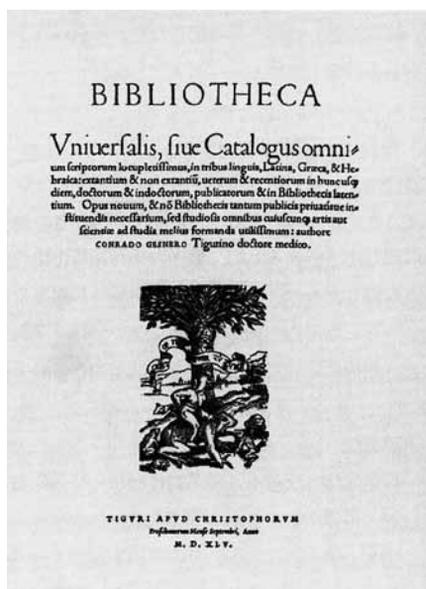


図4 ゲスナー『世界書誌』タイトルページ

出典：フィッシャー『ゲスナー 生涯と著作』p.35. より  
訳書においては『書誌総覧』と記載

いう言葉から始まっている。<sup>(23)</sup>

ブレアの第一章「比較の観点から見た情報管理」では、早々に「多すぎる書物という主題」が掲げられている。

図4に示すゲスナーの『世界書誌 (Bibliotheca uniuersalis)』は、スイスのチューリヒにおいて一五四五年に刊行された。書名は長く、「萬有書誌、あるいは、三種の学問語、即ち、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語で書かれたあらゆる著作の、並びにわれわれに伝承された、同様に失われた、古代の、また現代にいたるま

での比較的最近の、学識のある、そして学識のない、公にされた、あるいは未だ印刷されず図書館に埋もれている著作の内容豊かな目録。これは公の、そして私的な図書館を構築するために必要不可欠な新しい著作であるばかりでなく、あらゆる技芸、学問に意欲を燃やす者たちがその研究を有用なものとするために極めて価値ある著作。チューリヒの医学博士コンラート・ゲスナーによって執筆される<sup>(24)</sup>」である。

グーテンベルクの発明から一世紀も経てはいない時点において、ゲスナーの胸中に去来した、「大量の書物」は記録されなければ瞬く間に失われるという、フロロとは真逆の虞れから生まれた壮大な「世界書誌」へ向けての夢の始まりであった。

ゲスナーの伝記を書いたフィッシャーが指摘するように、ゲスナーは「この地上にあるすべてのものの無常さ」に抗い、書誌によって本の記録を残す、「世界書誌の夢」への一歩こそが、本書の編纂刊行であったと言える。

『情報爆発』のブレアは、ゲスナーが抱いていた「多すぎる書物という主題」についての感情を、「この時代における無益な書き物の愚かしさ」や「有害で人を混乱させる書物の氾濫」に苦言を呈し<sup>(25)</sup>つつ、同時に「その状況に高揚していた」(傍点、筆者)と書いている。

ここにがあるゲスナーの高揚は、ボルヘスの『バベルの図書館』における「途方もない喜び」であり、エーコの『薔薇の名前』における「キリスト教世界で最大の図書館にいる」と叫ぶバスカヴィルのウィリアム修道士の驚喜と同質のものである、と云ってよい。

そして、『薔薇の名前』のあの修道院図書館も、あるいはスペインのフェリペ二世の絶対王政のもとにおいて構築された、あのエル・エスコリアル宮殿<sup>26</sup>の中の大広間図書館に寄贈されながらも焼失してしまったヴェネツィアの友人、デイエホ・ウルタド・デ・メンドサ私有の蔵書など、「失われた図書館」の影は常にまといつき、だからこそ一層に、フィッシャーの言葉を再び引くならば、「この地上にあるすべてのものの無常さ」に抗して、ゲスナーの「世界書誌」は構想されたのであり、今日まで、その思いは図書館員の夢想到脈々と継承されているのである。

もう一度、シャルチエの「この夢はまた、世界の記憶を収容できる建物を造るといふ建築の所作にも指示を与えてきた」といふ言葉に戻ろう。

フランス国王フランソワ一世が一五三七年に発したモンペリエの勅令から始まる納本制度は、西欧各国の王権に広まり、国王によるこれまでになく巨大な図書館の誕生は、フェリペ二世のエ

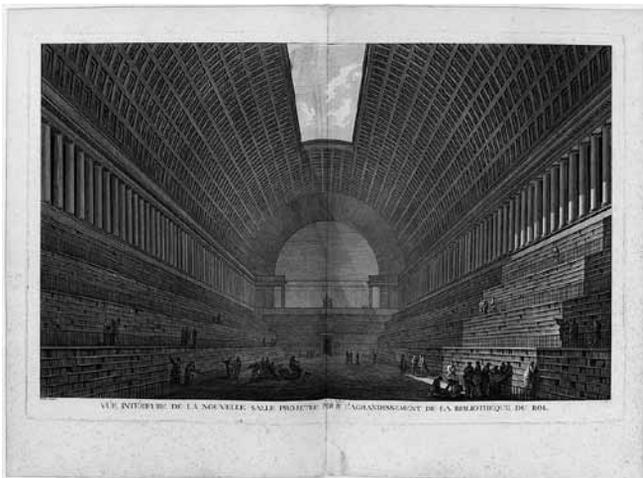


図5 エチエンヌ＝ルイ・ブーレ『国王図書館のための第二の計画案』1785

Boullée, Etienne-Louis (1728-1799). Mémoire sur les moyens de procurer à la bibliothèque du Roi les avantages que ce monument exige, 1785.

Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b100203654/f12.highres>

Courtesy Gallica, BnF, Paris.

シャルチエ『書物の秩序』ちくま学芸文庫, p.126.

ル・エスコリアルを典型に進み、シャルチエはフランス革命直前にエチエンヌ・ブール (Etienne Louis Boullée, 一七二八～一七九九) によって描かれたフランス王室ルイのための図書館のイメージ (一七八五年、図5) にたどり着くことを示すのである<sup>(27)</sup>。ブールのほかの建築プランの図と同様、このきわめて夢想的な王室図書館のプランはフランス革命によって瓦解するのであるが、以後の歴史は、亡命イタリア人、アントニオ・パニッツィ (Antonio Panizzi, 一七九七～一八七九) による大英博物館の中の大円形閲覧室 (一八五七～一九九七)<sup>(28)</sup>、フランス国立図書館 (略称 B N : Bibliothèque nationale, 一八六八～)、そして新大陸アメリカに誕生する市民によるボストン図書館 (Boston Public Library, 一八八八～)、大統領による議会図書館 (略称 LC : Library of Congress, 一八九二～) が、現実の図書館の機能をもって、ゲスナーの世界書誌の夢を継承しているのである<sup>(29)</sup>。

### 三. 美術館が「編む」ものの一つとしての

#### 美術書誌をめぐって

美術館での体験をふまえて、もう一つ、書誌に関わる断想を書いておきたい。

以前、「ミュージアム・アズ・パブリッシャー 『現代の眼』に思うこと」という一文を前職での東京国立近代美術館のニュース誌である『現代の眼』が創刊五〇周年を迎えた折に書いたことがある<sup>(30)</sup>。

美術館の諸活動の成果を示すためにさまざまな出版活動を美術館は行ってきた。時として、その活動は看過されることもあったが、よく見直せば、美術館はきわめて旺盛なパブリッシャーとして、所蔵品目録 (あるいは図録) や展覧会カタログから始まり、年報、紀要、ニュース誌など定番の逐次刊行物、シンポジウムの開催の記録、テンポラリな研究成果報告書、教育普及のための「キッズガイド」の類、展覧会に際し作成配布されるチラシ、ポスター、フロアマップなどのエフェメラ<sup>(31)</sup>などその種類は多岐にわたっている。

所蔵品の収集および企画展の開催に伴って刊行される所蔵品目録 (図録) や展覧会カタログと呼びならわされるものは、美術館が作品をめぐって「編む」出版物の代表格と言える。これらはいずれも美術館の「作品」を主役として編まれた出版物であるが、美術館の枠を越えて、広く美術品についての編まれた出版物を詳述した、島本浣による労作『美術カタログ論 記録・記憶・言説』<sup>(32)</sup>がある。本書の第一部「記録・記憶としてのカタログ」にお

いて、島本は以下の五章をもって、美術カタログを四カテゴリーに整理している。

I 章 美術カタログ—定義

II 章 競売カタログ

III 章 展覧会カタログ—サロンを中心に

IV 章 美術館カタログ—ルヴルを中心として

V 章 カタログ・レゾネ（作品総目録）、画集

美術館は美術作品を収集し、所蔵品の展示及び企画展覧会を開くことが主たる活動であるが、それらはいずれも深い調査研究活動に裏打ちされたものであることが肝要必須であるから、自然、図書室（アートライブラリ）が附置され、公開もされている。

所蔵品目録、展覧会カタログが作品を主役とする美術館が「編む」出版物であるのに対し、この美術館のなかのアートライブラリにおいては、美術文献を主役とする美術館の「編む」出版物として、美術書誌が数多く生み出されている。

インディペンデントな美術書誌作成家であり、その成果の一頂点に位置づけられる『美術家 書誌の書誌』<sup>33)</sup>をまとめた中島理壽は、かつて日本の展覧会カタログについての一文の中で「書誌の宝庫としての展覧会カタログ」と指摘し、「特に美術家の個人書誌はどの分野にもないほど充実している」と書いている。<sup>34)</sup>

東京都立中央図書館から東京都美術館の本邦初の本格的公開美術館（内）美術図書館を開く現場に居合わせた中島は、その後、インディペンデントの美術ドキュメンタリストを名乗り、多くの美術（家）書誌と年譜・年表を編み、斯界の第一人者となった。その一世代前に、中島の仕事の先駆者として、一〇〇人を越す近現代日本美術家の書誌を編んだのが、初代の東京国立近代美術館の企画・資料課資料係長兼主任研究官の職を全うした土屋悦郎だった。

「日展三山」の東山魁夷、杉山寧、高山辰雄など、主要近現代の日本美術の作家のほとんどの書誌と年譜は、この土屋の手によってはじめて記録が編まれ、残されたと言つてよい。その後には編まれた後継の書誌、年譜は、土屋の文献と事績の探索と記述の記録・定着の上に築かれたものであるのが大半である。初手と二番手とは、書誌、年譜作成のための苦勞苦心のありようには、大きな差異がある。多くの書誌、年譜を残しながら、土屋は自ら自身の書誌・年譜論を語ることはきわめて少なかった。わずかに東京国立近代美術館のニュース誌『現代の眼』に〈美術ノート〉として書き残し、年譜の個々の事績の真正性に関わつて唱えた「典拠文献主義」についての二篇があるのみである。

「美術ノート」典拠文献」『現代の眼』一八一号、一九六二年一

二月、六〜七頁。

「〈美術ノート〉年譜をつくる」『現代の眼』二一九号、一九七三年二月、四頁。

一八一号の論考においては、第一回聖徳太子奉賛会総合展に出品の岡田三郎助の作品《掛をかける女》の題名をめぐって当時の美術雑誌、新聞、没後の『日本美術年鑑』所収「昭和十五年出版物作家及美術関係者欄」に現れる本作品の題名が、「掛をつけたる女」「掛けを着たる女」「掛を着けたる女」（傍点、土屋）と揺れている事例を重ねて書き起こして、最後に、「いったいこの女には掛をつけたほうがよいのか着せた方がよいのか、それともかけさせたほうがよいのだろうか？」と氏には珍しくユーモア感のある言葉で問いかけていた。そして、このように出品作品の題名一つについて、あるいは藤田嗣治が初めて渡欧した時の乗船の港や、平柳田中の生年月日、小山正太郎らが起こした結社は一会なのか十一字会なのか、などなど、事実と文献の記録との間に揺られる揺れや齟齬の中から、なにを残すかを典拠文献の吟味にまで遡って、「年表年譜の客観性が失われないようにその文献の信憑性をよくよく見きわめなければならない」と締めくくっていた。

今日多くの日本の展覧会カタログには巻末に個展であるならば

美術家の個人書誌とその年譜が参考資料として掲載されて、その精緻さはいよいよ高度化の傾向を示している。

例えば、二〇一二年四月に盛岡の岩手県立美術館を皮切りに、葉山、仙台、松江、世田谷を巡回した『生誕一〇〇年 松本竣介展』の図録には、二〇〇余頁の作品編とほぼ同ボリュームの資料編が編まれて、年譜、展覧会出品目録、文献目録などが収載されて、あたかも全体で松本竣介百科事典の趣を呈している。例えば、この文献目録は、承前の二点の展覧会カタログに所収の既存書誌を踏まえて改訂されている。書誌と年譜はまたこのように踏み越えられ、改訂されていくことによってあらたな命が吹き込まれる、生きた編纂物であることが、あらためて確認されるのである。

おわりに―情報の「次性」の復権を

以上、書誌についての断想を書き連ねてきた。本学での司書資格課程の科目、特に図書館概論、情報サービス論で冒頭のジョンソン博士の警句を紹介している。「第一の知識」から「第二の知識」としての例えば「書誌」を、さらには、「第三の知識」としての「書誌の書誌」の存在について伝える。

「書誌」にせよ、「書誌の書誌」にせよ、そこに記述された文

字の連なり、テキストは、「一次」の知識を内包する文献、記事、資料等々について、あるいは「二次」の書誌、文献目録、索引等々「についてのデータ」、すなわちメタデータを集成したものである。メタデータを抽出し、それを集成すること自体、メタ化の作業と呼びうる。

このように一次をメタ化すると二次が生まれ、二次をメタ化するならば三次が生まれるように、情報には「次性」があることを伝えることが肝要であると考えている。

三次（「書誌の書誌」）を見れば二次（書誌）の「ありどころ」が分かる、二次を見れば一次（「第一の知識」）の「ありどころ」が分かることの構造を、「情報の「次性」として認識されるべきところへと導く（図6）。

それは、現代の調べる道具のもっとも身近で大きな力をもつインターネットのサーチ（ググる、と言っても良いだろう）の行為において、検索結果の一覧とその先のリンクへの辿りの過程においては、この「情報の「次性」」の構造がすっぽりと抜け落ちていくからである。

アレクサンドリアの図書館のカリマコスから、ゲスナーへ、また本稿では触れられなかったが、『世界書誌目録 (Répertoire Bibliographique Universel : RBU)』を一九世紀末にラ・フォン

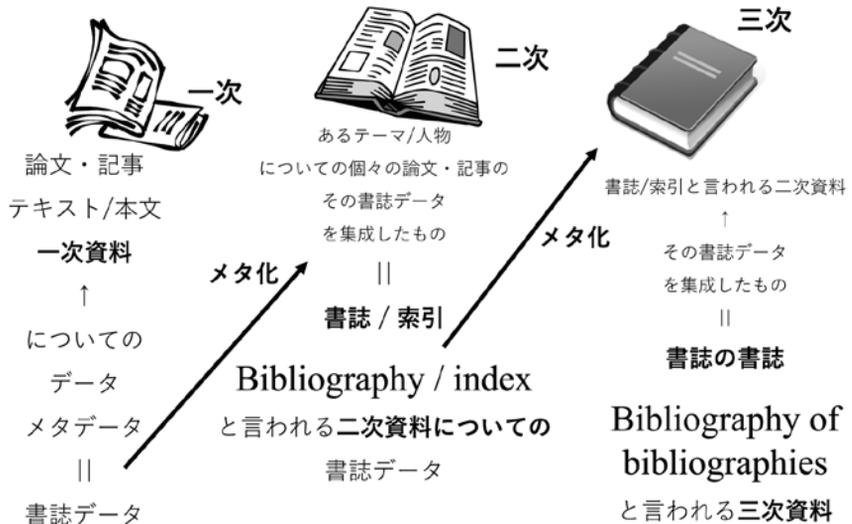


図6 「情報の次性：文献（一次）・書誌（二次）・書誌の書誌（三次）」

テースとともに創案したベルギー人ポール・オトレ (Paul Marie Ghislain Otlet, 一八六八—一九四四) や幾多の図書館員あるいは図書館学者が営々と築いてきた「知識と情報を編む」ところにある知恵の伝承の一角として、「書誌を編む」ことの意味をいかに伝えられるか、ペンとキーボード、紙とディスプレイの違いを越えて、今後いかに継承できるのかを自らと学生に問いかけていきたいと考えている。

註および参考文献

- (1) 光文社、二〇一一年。
- (2) 三浦、前掲書、二七頁。
- (3) 丸善、一九八二年。
- (4) 新版、日本図書館協会、二〇〇四年。
- (5) 丸善、一九八八年、七五—九二頁。
- (6) 上下巻とも、日外アソシエーツ、一九九七年。
- (7) 堀込は、長澤の『書誌作成マニュアル—文献目録を作る人のために』(日本索引家協会編集、日外アソシエーツ、一九八〇年)の「第一章 書誌とその構成」にある五頁の、「図1-1 書誌(学)の種類」をほぼ踏襲して、「列举書誌」を「体系書誌学(列举書誌)」とし、それに対当するものとして「分析書誌学(批判書誌学)」を当て、下位層に「史的書誌学」「原文書誌学」「記述書誌学」を位置づけており、全体を「書誌」として括っている。堀込「書誌と索引—情報アクセスのための機能と使い方」(図書館員選書・一九) 日本図書館協会、一九九〇年、一八頁。

上記の『書誌作成マニュアル』は日本索引家協会 (Japan Indexers Association) の編集によるものである。このマニュアルの「まえがき」において長澤は、「書誌本体の編成のあり方と表裏一体の関係にあるのが索引である」(iii 頁)と書いたように、索引家および書誌編纂家は多くが重なる。その索引家(indexers)による専門職能団体として、the Society of Indexers: the professional body for indexers in the United Kingdom and Ireland が誕生したのが一九五七年のJAIである。 <https://www.indexers.org.uk/>

以後、American Society for Indexing、Indexing Society of Canada、Australian and New Zealand Society of Indexers、China Society of Indexers のあることが同協会のサイトから確認できる。日本においても多数多岐にわたる書誌、参考図書を専門に刊行する出版社、日外アソシエーツに事務局を置く日本索引家協会が一九七七年に誕生して、専門誌『書誌索引展望』も創刊されたが、惜しくも、一九九七年三月に二〇巻四号および別冊を刊行して幕を閉じた。日本索引家協会は、先に挙げた『書誌作成マニュアル』(一九八〇年)、『索引作成マニュアル』(一九八三年)を遺して、日本の書誌索引論の深化拡大に寄与した。その専門誌『書誌索引展望』に掲載されたものから五二点が選別されて採録されたのが、『書誌をつくる 上・下巻』(ともに一九九七年)である。書誌の事例として、その九分類のもとに、個別の書誌名を以下に挙げておく。

1. 書誌の書誌 例…沖繩書誌総覧—沖繩書誌の書誌 ほか一点
2. 解題書誌 例…アメリカ文学研究資料事典—アメリカ研究図書解題 ほか六點
3. 選択書誌 例…世界を学ぶブックガイド—世界地域研究基本文献目録 ほか三點
4. 個人書誌 例…芥川龍之介書誌・序 ほか四點
5. 著者書誌 例…開高健書誌 ほか四點

- 以上、上巻
6. 解題書誌 例・外国における日本文学——一九四五—一九九〇 ほか一三点
7. 雑誌記事索引 例・経済学文献季報 ほか二点
8. 所蔵目録 例・京都大学人文科学研究所蔵日本関係欧文図書館総覧——一九五〇年以前刊行分 ほか五一点
9. 総合目録 例・埼玉県立図書館合同蔵書目録Ⅱ ほか五一点  
以上、下巻
- (8) 後日刊行の講談社学術文庫版（一九八五年）にはこの巻頭の頁が削除されているので、注意を要する。
- (9) 通称JALプロジェクトについては次を参照のこと。http://www.rnomat.go.jp/am/library/jal2016/
- (10) Wさんのプレゼンテーションの全文およびスライドは右記アドレスから辿り http://www.rnomat.go.jp/am/wp-content/uploads/sites/3/2016/04/J2015\_220.pdf より入手可。
- (11) アレクサンドリアの図書館の終焉については諸説あるが、邦文の基本書としては、モスタファ・エル・アバディ著、松本慎二訳、『古代アレクサンドリア図書館 よみがえる知の宝庫』中公新書、一九九一年がある。二〇〇九年公開の映画『アレクサンドリア』（原題：Agora）においてはキリスト教徒による破壊と明示的に描かれている。
- (12) 藤野幸雄著『図書館史・総説（勉誠出版、一九九九年）において、「資料集積の痕跡をただちに図書館と見なすには異論がありうる」（一五頁）、など。
- (13) 鼓直訳『伝奇集』岩波文庫、一九九三年に所収。
- (14) 河島英昭訳、東京創元社、一九九〇年。
- (15) この訳文は、註(16)のちくま学芸文庫に引用の篠田一士訳、『別冊国文学』二二二のもの。
- (16) シヤルチエ著、長谷川輝夫訳、文化科学高等研究院出版局、一九九三年、後に、ちくま学芸文庫、一九九六年。
- (17) シヤルチエ、前掲書、一二四頁。
- (18) 清水由貴子訳、柏書房、二〇一三年。
- (19) ユゴリ著、辻昶、松下和則訳、岩波文庫、二〇一六年、上巻、三四七頁。
- (20) ユゴリ、前掲書、三七八頁。
- (21) ゲスナーについては、左記文献に多くを負っている。記して、謝意を表したい。
- ハンス・フィッシャー著、今泉みね子訳、『ゲスナー 生涯と業績』博品社、一九九四年。
- 雪嶋宏一「コンラート・ゲスナーと一六世紀ヨーロッパの図書館」『図書館文化史研究』三、四号、二〇一七、一〇一—一二八頁をはじめとする先行関連諸論文。
- 和泉雅人「Conrad Gesner: 『萬有書誌』及び慶應義塾図書館所蔵総手彩色『動物誌』について」『慶應義塾図書館の蔵書』慶應義塾大学出版会、二〇〇九年、五—五六頁。
- Bibliotheca universalis* の訳語についても「萬(万) 有書誌」「書誌総覧」など複数のバリエーションがあるが、本稿においては、「世界書誌」として一貫した。
- (22) フィッシャー、前掲書、五頁。
- (23) アン・ブレア著 住本規子、廣田篤彦、正岡和恵訳、『情報爆発 初期近代ヨーロッパの情報管理術』中央公論新社、七頁。
- (24) 和泉、前掲書、一五四頁。
- (25) ブレア、前掲書、七四頁。
- (26) 司馬遼太郎は、「エスコリアル宮でフェリーペ二世に出会ってしまったゆゆしさと」と「街道をゆく二三 南蛮のみちⅡ」において書いているが、造営者

である王フェリーベとともに、あるいは王以上に異形な存在が、この「なぞ鯨鯢捨て場」の意を持つエスコリアル宮であることが司馬の短文から垣間見られる。朝日芸文庫、一九八八年、九二―一〇三頁。

(27) シャルチエ、前掲書、一二四頁。

(28) この大英博物館円形閲覧室に日参して研究に没頭した南方熊楠は、渡英前、アメリカ滞在中の日記に、「夜感有り、コンラード・ゲスネルの伝を読む。吾れ欲くは日本のゲスネルとならん」と書いたことを思い合わせるならば、ゲスナー―南方バニッツィの、三者の円環が結ぶのである（参考…桂英史著『メディア論的思考』青弓社、一九九六年、九〇頁）。

(29) 一九世紀末から活動を始めるポール・オトレのドキュメンテーション活動、二〇世紀半ば以降に発展するOCLCを中核とする書誌ユーティリティ、二〇世紀末から二一世紀にかけて進むGoogle Booksプロジェクト、Europeana、DPLA (The Digital Public Library of America) など、「世界書誌の夢」の系譜に位置づけて論じられるべき対象であるが、本稿では、紙幅の都合と本稿の性格に拠り、世界書誌の起源であり、「書誌学の父」（和泉、前掲書、五頁）としてのゲスナーとその周辺および若干の後継を紹介するに於いてのみ留め置いた。

(30) 水谷『現代の眼』五四九号、二〇〇四年二月―二〇〇五年一月、三頁。

(31) エフェメラ (ephemera) とは、もとは蜉蝣の意。儂く消え去りやすい片々たる印刷物の意であり、図書館に保存されることのない、アーカイブ化される対象の一カテゴリーとして扱われることが多い資料群。

(32) 三元社、二〇〇五年。

(33) 勉誠出版、二〇〇七年。

(34) 中島「日本の展覧会カタログについての一考察」『現代の図書館』、二八巻四号、一九九〇年、二二六―二三三頁。

註および図にあるURLは二〇一九年一月八日に参照して、確認。